

モチベーションをはぐくむ

—— 関西大学ロシア語教室の挑戦 ——

Как поддержать мотивацию учащихся при обучении иностранным языкам?

— Из практики преподавания русского языка в японском университете. —

北岡千夏

При обучении иностранным языкам вне языковой среды, когда у учащихся крайне мало возможностей использовать изучаемый язык, преподавателям в первую очередь следует думать, как побудить студентов к активным занятиям и как поддерживать их мотивацию. Безусловно, проблема мотивации является одной из самых важных не только в области преподавания иностранных языков, но и во всех сферах образования. Этот вопрос всесторонне исследуются в различных областях, в том числе в области педагогической психологии и социальной психологии.

В данной статье мы хотим поделиться опытом преподавания русского языка в разных группах японского университета, где в течение 10 лет разрабатывались и были опробованы различные подходы к обучению, объединяемые ключевым словом МОТИВАЦИЯ. Кроме того мы хотим показать, что в результате реализации этих подходов получили студенты и что обрели преподаватели.

はじめに

学習する言語を使う機会の乏しい環境での異言語教育でまず頭を悩ませることは、学習者のモチベーションを呼び起こすこと、あるいは、モチベーションを維持することであろう。もちろん、学習者の動機を引き出し学習意欲を高めることは、異言語教育にかかわらず、すべての教育の場における重要なテーマであり、だからこそ、教育心理学をはじめさまざまな分野で広く研究されているのであろう。そうであるならば、真正面からモチベーションをはぐくむことに取り組んでみよう。そのような思いから始まり、10年に渡りモチベーションをキーワードにさまざまな取り組みを展開してきたロシア語教育の現場での授業実践を紹介したい。

1. ロシア語学習への動機と目標

1-1. 対象のクラスへのアンケート

今回紹介する実践例は、関西大学のロシア語教室全体の取り組みであるが、特に、筆者が担当する総合情報学部主選択のクラスを対象とする。関西大学総合情報学部では語学教育に関し特徴的なカリキュラムが組まれている。学生たちは、英語、中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語の中から、主選択として1言語、副選択として1言語を選択する。主選択は、1年次週3コマ、2年次週2コマ、3年次週1コマ。副選択は、1年次、2年次とも週1コマ。また、副選択では、3年生になってもさらに学習を続けようという学生のために、選択授業として3年次に週2コマの授業が設定されている。大部分の学生が英語を主選択とする中でロシア語を選択する学生数は以下の通りである。

年度	主選択	副選択
2008	20	33
2007	28	45
2006	10	25
2005	10	12
2004	8	12
2003	8	8
2002	8	24
2001	2	
2000	9	
1999	10	
1998	7	
1997	5	

※大学から入手したデータが2002年までであるため、副選択は2002年まで。主選択の2001年以前は筆者の名簿による。

まず、入学時に学生たちはどのような動機でロシア語を選択しているか、また、大学での語学教育にどのような期待を持ち、どのような目標を設定しているかを2007年のアンケートをもとにみとめることにする。

授業に役立てるためのアンケートである。ロシア語を選択した動機と学習目標だけではなく、授業を進めていくに必要な情報をあらかじめ学生から得ておくことを目的としている。動機について問うた設問は次の2項「ロシア語を選択した理由」「ロシア語の授業に望むこと、どの程度できるようになりたいか」であるが、この2項の設問に対してどのような回答があったかということを書き記す前に、大学における語学教育に向ける学生の動機について考えてみたい。

ロシア語を選択した理由	ロシア語の授業に望むこと。 どの程度できるようになりたいか。
生徒さんたちが楽しそだったから。	楽しく学びたい。友達と話していると自然とロシア語が出ちゃうくらい。ロシア行きたい！
雰囲気めっちゃくちゃ楽しそうやと思ったから。色々な人と友達になれそうだったから。	簡単な会話ができるくらい。
授業が楽しそだったから。学ぶ機会が他になさそうだから。	自分が言いたい事をちょっとでもロシア語で言えるようになりたい。検定試験もうけたいです。
楽しそだったから。全く知らないから。レア。	読んで意味がわかる程度。検定はとりたい。
楽しそだと思ったから。	少ししゃべれるようになりたい。
たのしそだったから。	検定試験。
楽しい感じにつられた!! ピロシキがおいしそだった。	しゃべれるようになりたい。検定もとってみたい。
第1に英語が嫌だった。楽しそ。ブラックラグーン(マンガ)、MGS(ゲーム)	とりあえず単位は絶対。検定もとりたい。あるマンガのキャラの台詞をロシア語でわかりたい(笑)
外国語紹介の冊子を見て一番おもしろそだったから。先輩方に聞いたら「面白いよ」と言われたので。関大はロシア語をめずらしくやっているよ!! って書いてあったから。	単位はもちろんとりたい。楽しくやって英語より使えるようになれたらうれしいな(笑)
英語から離れたかった!!! ガイダンスに参加して、楽しそだったから。ピロシキ。イベントが気になった!	楽しく授業ができれば…!!! 少しでもコミュニケーションがとれるようになりたい。
楽しそだから。ガイダンスを見てきめました。	単位がとればばいい。それなりに読めるようになりたいです。でも、とにかく楽しんで勉強できればな、と思います。
ガイダンスが面白かったから。オリエンテーションがあったから。	面白くかつ単位がとれて、検定試験に合格したい。
ロシア語のガイダンスがおもしろかったから。	検定試験を目指したい。
シャラポワとしゃべりたい。ガイダンスに魅かれた。	シャラポワとしゃべりたい。通訳とまでは言わないけど、ある程度話せるようになりたい。
アットホームな感じがよかった。英語から離れたかった。ガイダンスがおもしろかった。ピロシキ。πのマークが知れたかった。	アットホームさ。おもしろさ。
紹介の時に、楽しそだと思ったからです。ピロシキ! でもドイツ語と迷ってました…	ある程度できたいです… 検定試験も取れたらいいなとか。
楽しそだと思ったからです。後、英ゴが全くできないので他のコトを頑張ろうと思いました。あと先パイにすすめられました。	ひとまず単位は絶対とりたいです。あとは将来のため資格とか取りたいのですがまずは単位がとりたいです。
万絵巻ですすめられた。とりあえず英語は絶対嫌だった。楽しそ。	ロシアの文字が書ける程度。単位は絶対とりたい、
先ばいから聞いた!	単位がとりたい!
センパイに聞いたから。	単語を覚える。
柔道部の先輩がいるから。	単位をとりたい。できれば検定も。
人の紹介	英語よりできるくらい。
なじみがなくて興味があった。まき舌がかっこいい。	単位は取りたいです。歌も歌いたいです。
授業の中で、いろいろな体験ができると思ったからです。他の授業と違って実際に文化に触れたりしながら学ぶ方が身につくと思ったからです。	文化にたくさん触れて、いろんなことをしたいです。使えるようになりたいし、資格もがんばってみたい!!

モチベーションをはぐくむ（北岡）

チェブラーシカが中2の頃から好きで、原作をロシア語で読めるようになったから。	検定がとれるように。絵本がよめるぐらい。あと、単位がとれば。
今からはロシア語くると思った。	日本語並に。とりあえず、まき舌できるようにになりたい。
特になし。	なるようになる。

かなり自由な文体で書かれたものをそのまま紹介したが、「教師の期待するであろう答えを書く必要はない、思うままに」というように指示をしたことからこのような表現になったものと思う。主選択であり、多くの時間をロシア語に充てることになるにもかかわらず、学生たちは特に明確なモチベーションなどもたずロシア語を選択している。「ガイドンスを見て楽しそうだった」というのが、ロシア語選択の主たる理由となっている。なお、ガイドンスでは、前年以前の授業の様子を写真や映像で記録したものを紹介している。

1-3. ロシア語学習の目標

動機が明確ではない以上目標のあろうはずもないが、そこは大学に入ったばかりの新入生であり、希望にあふれている。やるならある程度形になるまでやってみてもいいかもしれない、という気分も読み取れる。また、本アンケートは、できるだけ多様な意見を聞きたいと思うところから自由記述形式にしてあるが、かといって質問だけにすると、まだ何も始まらない大学の授業に対して何を答えていいかわからないところもあるであろうという配慮から回答を促すための例を挙げている。数年来の経験から、明確な目標を持つ学生はほとんどないと仮定しての配慮でもある。最近「学習者中心主義」ということがよく聞かれるが、特に習得の目標が明確ではない学生が多いクラスの場合、まずは授業を運営する教師が、担当する授業の目標を設定し、学生たちが授業を通して何を学ぶことができるか、具体的に示せることは示しておくことも必要であろう。そういった意図から検定試験のことにもふれている。

異言語学習における最近の傾向として、「その言語を使ってコミュニケーションができるようになる」という目標設定が主流になっている。もちろん、生きた言語を学ぶわけであるから、「その言語を使ってコミュニケーションができるようになりたい」というのは学習の自然な動機であろう。教師の側では、この「コミュニケーション」というのは、話すことに限定せず、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能すべてを対象とするが、学生に「何のために学びますか？」とアンケートを取れば、簡単に「話せるようになりたい」という答えが返って来ることが多い。これは異言語学習の目標としてのステレオタイプ的な考え方を反映しているにすぎない。このような現状の中で、このアンケートに見られる「絵本を読めるようになりたい」「マンガのキャラの台詞をロシア語でわかりたい」というのは、日本でロシア語を学ぶ学生の現実的な真の動機であり目標のひとつの形であろう。

2. モチベーションをキーワードにした授業展開

動機、目標ともに明確に持ち合わせない学生が大半であるクラスにおいて、いかにモチベーションをはぐくみ、維持しながら授業を展開していくか。動機、目標がないだけならまだしも、異言語に対する苦手意識や、嫌気を強く持つ学生も少なくはない。例年、ロシア語を選択する学生には、今回のアンケートにも見られるように、大学までの英語の学習で挫折を味わっている学生も少なくはない。

本報告が対象とする授業では、まず、そのような学生たちの異言語学習に対する苦手意識を取り除き、そしてその上で本格的な語学教育を展開するという段階的な動機付けを考えながら授業を進めている。苦手意識を取り除くという考え方や授業を楽しくする工夫は、多くの先生方が実際に毎日の授業の中でさまざまに展開されており、今更、小手先の工夫を並びたてたところで何ほどのものでもないことは十分に承知しているところではあるが、モチベーションというキーワードを意識的に掲げての授業であり、大学全体の取り組みに支えられた長期にわたる授業実践の記録として、紹介する価値があるものと考えている。

学習する言語を使う場がなく、将来的にも特に学んだ言語を積極的に使う場を想定し得ない環境での異言語学習であるということから、教室内の活動自体が学生のモチベーションをはぐくむものとなるような授業展開を模索しながらの授業であること、そこにさらに課外活動を組み合わせての大学全体での取り組みであるところに注目していただきたい。総合情報学部主選択の授業は2名の日本人教師と1名のネイティブの教師とのチームティーチングで行われている。また、本報告で紹介する課外授業は、関西大学のロシア語教室の教師全員で行っている。ほぼ月に1度のペースでの課外授業に全員で取り組むほどのチームワークのよさがあるこその教育実践である。

2-1. 最初の2か月——最初歩の段階での学習を進めるための動機づけ

- 異言語学習に対する苦手意識が強い学生の苦手意識を徐々に薄める工夫
- 授業に出席することが楽しいと思えるようにする工夫

まず、異言語学習に対する苦手意識が強い学生のその苦手意識を徐々に薄めるということを意識して毎回の授業シラバスを考える。単語や表現を覚えるためのゲーム、歌などを活用する。

学生の苦手意識の因子として、単語が覚えられないということが大きくある。毎回の授業で小テストを課すなどする方法もクラスによっては有効であろうが、苦手意識を強く持つ学生が多いクラスでは、テストなどはかえって語学嫌いを助長することにつながる危険性もあることから、最初歩の段階では、できるだけ授業時間内の活動で記憶できるような工夫をする。苦手

意識をもつ学生も、10個ほどの単語をさほど苦労した覚えもなく記憶できると、次に進んで行けるかもしれないという自信が生まれてくるようである。

ひとつの方法として、絵カードを使つてのゲームの試みを紹介する。同じイラストのカードを2枚めくって揃える。その際、イラストに描かれている物や動作をロシア語で表現する。



異言語教育でのタスクとしては陳腐なものであるが、大学の授業でこういったゲームを取り入れることには抵抗があるかもしれない。しかし、ゲームは上手く機能するとその活動自体が授業への積極的な参加への動機づけとなる。こういったゲームを取り入れることにより、授業の中で、教師対学生という時間と学生たちだけの活動の時間をうまく配分し、クラスの学生同士の人間関係を作るようにする。

また、学生たちにはロシア名をつけている。あだ名のようにその名前を使って呼び合うことにより、学生たちの間には、同じロシア語を学ぶものとしての仲間意識がはぐくまれるようである。教室の外でも気軽にロシア名で呼び合い、ロシア語であいさつを交わす、そういった空気がクラスに自然にできてくる。さらに、学生たちがロシア名をそれぞれに持つことにより、どの名前が男性の名前でありどの名前が女性の名前であるかということを自然に学ばせることにも役立っている。

2-2. 次に続く8か月——課外活動により動機づけを支える

- 異文化学習の場：学習言語がその一部である文化、その言語が使われている社会、その社会の世界の中での位置づけなどが理解、体験できるための授業プログラムをつくる。
- 学習言語を使う場を提供するための課外活動：コミュニケーション・アプローチを教室内でうまく機能させるために、実際に学習言語を使う経験ができる場をつくる。

学習している異言語が身近にある環境ならば、実際にその「言語を使う必要性」が最大のモチベーションとなるであろうし、英語のように、将来的に必ず必要になるであろうという予測ができるような言語の場合には、その「将来的な目標」がモチベーションになろう。しかし、ロシア語のように、学生にとって学習している言語を積極的に使う場を想定し得ない環境での異言語学習の場合、どちらも、動機付けの材料として期待できない。このような場合には、学

習過程そのものがモチベーションになるように考えてみるのもひとつの動機づけの方法であろう。続く8ヶ月は、授業に参加することが楽しい、出来るようになることが楽しいという状況を作り出すことを目標として授業を組み立てて行く。

ティーチングスタッフにネイティブの教師がいるならば、ネイティブの先生との会話が徐々に成立するようになることが楽しいかもしれない。学生同士で覚えた表現を使ってみることも面白いかもしれない。あるいは、そろそろ小テストなどを導入すると、点数が取れることが嬉しい学生も出てくるかもしれない。まずは、授業の中での達成感をモチベーションとしていくように授業を組み立てて行く。しかし、それだけではなく、実際にその言語が自然に使われる場に居合わせる機会や、その言語が話されている社会、文化にふれる機会があれば、さらに学習意欲は高まるであろう。どうすれば、そのような機会を創り出すことができるであろうか。

そこで考え出されたのが、数々の課外活動のプログラムである。5月のピロシキづくり、7月の学内暗唱・スピーチコンクールは毎年恒例。その他にも、マトリョーシカの絵付け、ゲストスピーカーを迎えてのロシアの文化や社会に関するレクチャー、ロシア語担当の教師のリレー講義、大学のキャンパスから飛び出して、ハリストス教会の見学など。それぞれの行事で、教師がロシア語学習のプログラム、異文化学習のプログラムを準備するだけではなく、学生た



上左：ピロシキづくり

上右：マトリョーシカの絵付け

下：「チェブラーシカ」の原作者ウスペンスキー氏の講演（授業で覚えた「チェブラーシカ」の挿入歌を参加者全員で歌って歓迎した。

ちが発表できる場を設け、積極的に準備し、参加することを促す。

「ピロシキ作り」では、ロシア語学習プログラムとして、ピロシキの食材をロシア語で覚え、作り方をネイティブの教師がロシア語を使って指導する。学生は、ピロシキ作りになんだロシア語での寸劇を用意し披露する。「学内暗唱・スピーチコンクール」では、学生たちが、ロシア詩の暗唱、ロシア語の歌、ロシア語での寸劇などを準備し披露する。

こういった場で、いつも授業で会う先生とは違ったネイティブの先生方と話す、相手が先生であっても、学生たちにとっては授業ではなく実際のロシア語を使う場とも感じられる。あるいは、ロシア人のゲストスピーカーのお話を聞く機会はもちろん、学内コンクールでいつものクラスの仲間とは違った顔ぶれの中でロシア語を聞くことや話すこと、ロシアについての社会、美術、音楽などさまざまな内容でのレクチャーを聞くことを通して、ロシア語が教室の中で勉強するだけの対象ではなく、生きて使われる言語であることが感じられるような場を学生たちに提供することができる。

また、高大連携、中大連携といった大学の企画にも積極的に参画している。学生たちが、中、高校生に対して自分たちが学んだロシア語のアルファベットや、挨拶・自己紹介などのフレーズを指導したり、マトリョーシカの絵付けなどの作業を一緒にすることによって、ロシアについて学んだことを異文化学習として中、高生に話す場を設ける。学生たちには、自分たちが学んだことを客観的にとらえる機会になる。

2-3. 2年目 —— 中級にステップアップするための動機づけ

- 外部試験の導入
- スピーチコンクールへの挑戦

1年間、教室内、教室外、いろいろな活動を通して、ロシア語を学んで行く。もちろん文法の学習もしてはいるが、1年目は、あまり細かなことにはこだわらず、2年目から、しっかりした文法体系を頭に入れることを目標に授業を進める。そのためのひとつの目標として、検定試験を提示する。実際に受験するのは希望者だけである。

2001年に ТРКИ (= Типовые тесты по русскому языку как иностранному ロシア連邦・教育科学省が主催するロシア語能力検定試験) を目標とすることも検討し試みてみたが(北岡2003)、ТРКИ は、週に2回、3回の授業では、初級レベルでもなかなか合格点が出せない。必要以上に高い目標設定はマイナスの動機づけ要因にもなり得ると判断し、まずは、東京ロシア語学院ロシア語能力検定委員会によるロシア語能力検定試験の4級を目標としての学習を授業にとり入れている。この試験の4級、3級レベルでは、文法の基礎固めができていくかどうかということが問われる。試験準備をすることを通して、一定量の語彙を習得し、初歩の文法

をしっかり理解して整理し確実な知識とすることができる。また、ロシア語での朗読も課せられるので、発音やイントネーションについても改めて集中的に学習する機会となる。さらに、特に積極的に学ぶ学生には、スピーチコンクールなどに参加するように勧める。



この検定試験は1年に1回で、毎年10月に行われるため、検定試験を目指すには、夏休みのブランクがかなり問題となる。そこで、

8月、9月に合宿や勉強会を行う。合宿で検定に向けての勉強をするのは2年生以上の上回生で、1年生には長期休暇で忘れかけているロシア語を思い出すためのゲームなどを取り入れた授業を行う。この合宿は、学生たちにとっては、クラスの仲間との親睦を深め、他学年、他学部のロシア語を学ぶ学生との交流の機会ともなり、非常に楽しい企画として好評であり、はじめての2003年には12名で行った合宿も、2007年には40名を超える参加となった。合宿を行うようになってから、秋の授業をスムーズに始めることができるようになった。

一定量の語彙を記憶することや文法の細かな規則を覚えるという作業は、積極的な学習への取り組みがなくてはなかなか達成できない。しかし、この段階を超えないと中級レベルに進むことはできない。検定試験導入により、3年生の授業での到達目標を上げることができるようになった。

さらに、外部試験の導入は教師と学生の変えるきっかけにもなる。教師が学生に課す試験では、教師対学生という構図になるところが、外部試験に向けての学習では、教師は学生の応援団の役割となる。これにより、3年生の授業での、学生のより積極的な授業への取り組みが期待できるようになった。

3. 学生たちが得たものと教師が得たもの

- 教室運営のしやすさ——強要しなくても学ぶ姿勢、クラスの学生たちの和
- 異言語学習から得られる興味の広がり

本稿で報告した授業実践は、経験則に基づく手探り、試行錯誤によって創られたものにすぎないが、ドルニエイの動機づけストラテジーのモデルにより理論的な裏づけを得ることができるのではないかと考えている(図1、ゾルダン・ドルニエイ 2005:32)。ドルニエイは、教室での活動という観点からの第2言語学習の動機づけモデルを構築し、動機づけを動的なものとして捉え、時間の経過の中での変化にも注目している。

ドルニエイは、また、人を動機づけるのに必要なこと、あるいは、学習者を動機づけるのは誰の責任か、という問いかけへの答えとして、次のように述べている。

- 動機づけの過程は普通、長期間にわたるものである
- 学習者を動機づけるのは、おそらく、生徒の成長を長期的に考える、すべての教師の責務であろう
- 動機づけ訓練は長期的に見れば大きな成果の期待できる投資であるし、教室内での教師自身の生活を今よりもずっと楽しくしてくれるものでもある

ゾルダン、ドルニエイ（2005：26-29）

これは、本報告の授業実践の中で経験したことにそのまま合致する。教室活動の中、あるいはその延長線上にある教育実践の場での動機づけを考える場合、学習過程のそれぞれの段階に応じた適切なアプローチが教師の側から継続的に行なわれる必要がある。また、動機づけのためのさまざまな試みは、確かに「大きな成果の期待できる投資」であった。授業の準備に費やす時間、課外活動に費やす時間、膨大な時間を費やしているわけだが、得られるものは大きい。確かに、授業のために教室に向かうことが楽しい。

学生たちはどうであろうか？

2007年度の夏合宿で学生たちに「ロシア語を選択してよかったか？」「何か得るものはあったか？」というアンケートをしている。回答は、ほとんどが「楽しいからよかった」「イベントを通してロシアのことを知ることができたのがよかった」であるが、いくつか、このためにこそ膨大な時間を費やしてきたのだということに対する応えのような回答があったので紹介する。

- 新しい言葉を学ぶことが楽しいと思えるようになりました。
- 知識はもちろん、英語以外の語学を学ぶ楽しさを知った。
- 授業に行きたくなるような授業をしてもらっていると思う。
- 毎回の授業を楽しみにしている自分がある。
- 久しぶりに授業の楽しさを知った気がします。
- 毎回の授業ががとても楽しいので、1回1回の授業を大切にこれからも学んで行きたいと思っています。
- 遊び感覚で授業をしていたとしても、しっかり身に付いている。
- 習得を目的としつつも、それだけにこだわらない感じが般教ほくておもしろいです。
- イベントを通じて学ぶ面白さを思い出しました。

- イベントがあるから勉強の励みになる。
- いろんなお話を聞いたり、いろんな事をする機会を与えてもらって、貴重な経験をさせてもらっていると思います。イベント等を通して、自分の興味の幅を広げる良いきっかけが見つければいいと思います。
- 得たものは、友人とささやかな意欲。
- 得たものは、コミュニケーション能力と知らないものに向かっていこうと思える力。

学生たちは、授業の本来の目標は学習言語の習得であるということも、そのために教師がいろいろな工夫をしていることも十分にわかっている。その工夫によって学習言語の習得に一生懸命になる学生もいれば、課外授業の楽しさを体験するだけで十分という学生もいる。課外授業から興味をいろいろな方向にどんどん膨らませる学生も出てくる。それぞれの学生がそれぞれ自分に合ったようにロシア語の授業を自身の人格形成に役立ててくれば、大学における異言語教育の役割は十分果たされているのではないであろうか。

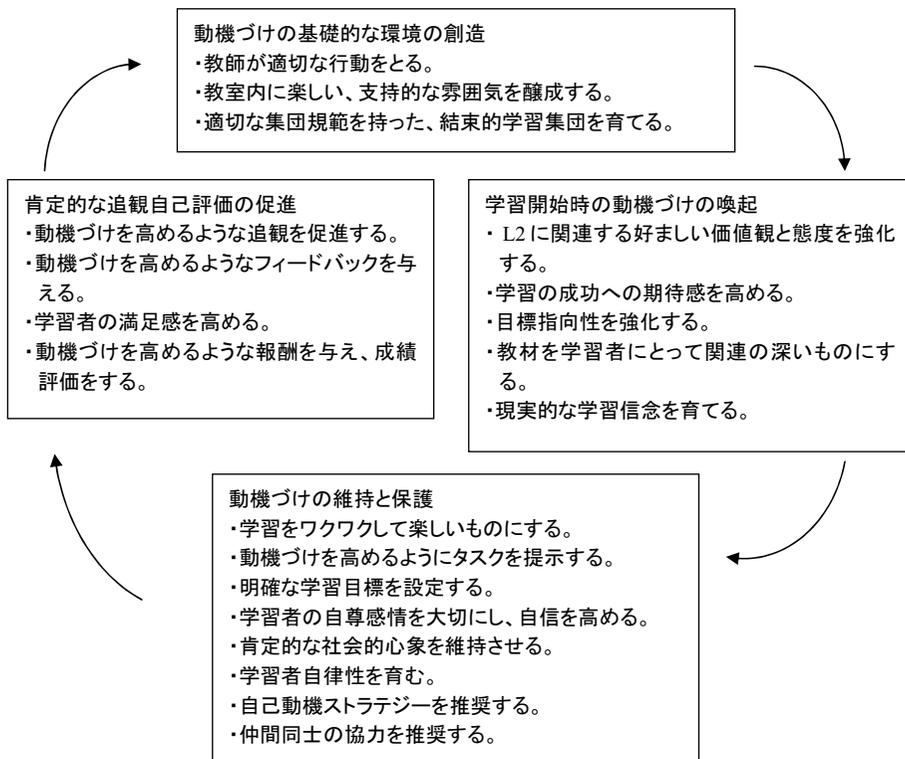


図1

4. おわりに

1999年に総合情報学部を担当するようになってから8年間に亘る試行錯誤の結果たどりついたひとつの異言語教育実践の例を紹介した。1999年の3年生のクラスでは、毎回授業に来る学生は1名。残りの学生は日替わりで出席する。Какая погода? 「どんな天気?」と質問するとТрудная погода. 「難しい天気です。」と返事が返ってくる。「何それ?」と尋ねると、「ネイティブの先生がいつも трудно (難しい) って言ってたから、形容詞は трудно しか思い出せない」と言う。勉強したことは長期の休みに忘れてしまう上に、3年生になってほとんど授業に出てこないのだから仕方がない。主選択でロシア語を学んで、そのまま卒業するつもり? どうにかしなくちゃ、と、出席代わりにスピーチコンクールに出てもらおうかな、ということになった。提案した自分自身が恨めしいぐらいに手がかかった。原稿作りに自宅まで学生を連れ帰って、出来上がったのは締切の日の夜中0時。それから、休日返上の練習。それでも学生たちは、やってみてよかったと感想を述べた。大学に入ってからこんなに勉強したのは初めてだ、と。

続く2年間、授業を教室ではなく中庭やカフェでやってみるなどして自然な形でリラックスして学ばせることはできないか、ことばを学ぶことの面白さを感じてもらえないか、といろいろ工夫はしてみるものの、所詮、小手先の工夫であった。実際には、1年生にはオーソドックスな教科書中心の授業、上回生にはスピーチコンクールへのチャレンジを勧めるという方法で授業を進めているにすぎなかった。その結果、得たものは、ロシア語教育のクラスではよくある、ひとりふたりの非常に熱心にロシア語を学ぶ学生と、とりあえず単位に足りるだけ出席をしておこうという大多数の学生に加え、ロシア語に敵意すらもっているのじゃあないかと感じるような態度で授業に参加する学生。

大学の異言語教育におけるロシア語履修者が全国的に減少するなか、その原因はおおよそ社会的な要因ではあるが、そもそも授業のやり方にも問題があるのではないかと考え、2000年に「ロシア語教育研究会」を立ち上げ、語学教育について真剣に学び始めた。コミュニケーション・アプローチ、学習者中心主義、TRKI など、さまざまなアプローチを次々に授業現場に取り入れ実践してみた。この3年、ようやく手ごたえを感じている。1年生のクラスでは人数も増え、学生たちは楽しそうに学んでいる。そして、3年生のクラスでは、明らかに楽しいだけではない効果が見え始めている。

2003年度入学の学生は8名のうち4名が検定試験4級合格、そのうち1名がさらに3級合格と就職活動のエントリーシートに書くことができた。3名はロシアへの1か月語学研修に出かけ、良い思い出をつくった。

2004年度入学の学生は、検定試験こそ1名しかチャレンジしなかったが（3級合格）、課外授業での経験を活かして、学祭でロシア料理を作る、高大連携などの活動の中でロシアについ

て紹介する講師の役割を果たすなど、ロシアについての興味を膨らませてくれた。

2005年度入学の学生は、3名が検定試験4級、1名が3級に合格。2名はペテルブルクへ1年間留学した。

2006年度入学の学生から2名は、これまで3年次での4級受験であったのが2年次に検定試験4級に合格。関西ロシア語スピーチコンクールの初級部門での優勝も果たした。そして、今年も、2006年度入学の学生たちと2007年度入学の学生たちが集まって検定試験に向けての勉強会をしている。秋から1年間のロシア留学へ旅立つ予定の学生も勉強会に加わっている。

今年、3年生でさらに新たな試みを始めている。ロシア語以外の言語を選択する学生たちとの合同授業である。「複数言語主義」という概念も唱えられる国際化の流れの中で、さらに、広い視野を持ち、自分とは異なるものをどんどんと吸収していく力をもつ人材を育成したいという思いからの試みである。今年、前期に1度、ロシア語とドイツ語の合同授業を企画し、学生たちは、それぞれに2年半学んできたことを互いに紹介しあった。この試みが、今後どのような展開をみせるかは、また改めて報告したい。

参考文献・資料

- Dörnyei, Zoltán 2001 *Motivational Strategies in the Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press. (米山朝二・関昭典訳 2005『動機付けを高める英語指導ストラテジー35』).
- Kitaoka, Chinatsu (北岡千夏) 2003 「日本の大学におけるロシア語能力検定試験実施の試み」『関西大学 外国語教育フォーラム』第2号.
- Kondo, Masao (近藤昌夫) 2005 「関西大学におけるロシア語教育プログラム「第1次5ヶ年計画」の総括と「第2次5ヶ年計画」の経過報告」『SLAVIANA』20.
- Yashima, Tomoko (八島智子) 2001 「国際的志向性」と英語学習モチベーション——異文化コミュニケーションの観点から——『関西大学外国語研究』創刊号.
- Yashima, Tomoko (八島智子) 2004 『外国語コミュニケーションの情意と動機』 関西大学出版.